

1 はじめに

都市におけるパブリックアートは、その国や都市のもつ歴史や政治、経済、文化、人種等、様々な社会的事象を背景とし、その必要性から導入方法、実践の手法、発展まで各国異なる。そのため、ここでは、日本におけるパブリックアートの実践について具体的事例を報告することを中心とし、欧米における動向を交えることで、日本を含めアジア諸国において各国が独自のあり方を模索し、発展させるためのひとつの切り口を提示することを試みる。

2 事例1:九州大学 伊都キャンパス(福岡)

アートワーク整備検討ワーキンググループによるガイドラインの策定

九州大学では、「21世紀を生き続けるキャンパスの創造」を目指し2001年3月、「新キャンパス・マスタープラン2001」を策定した。長期にわたる施設整備の中でマスタープランの精神を維持し、実現していくためには、新キャンパス全体に展開するパブリックスペースのデザインや整備手法その他について、指針やルールをつくる必要がある。そのため、新キャンパス計画専門委員会のもとに佐藤優教授、坂井猛教授を中心とした学内有識者によるパブリックスペース・ワーキンググループが組織された。

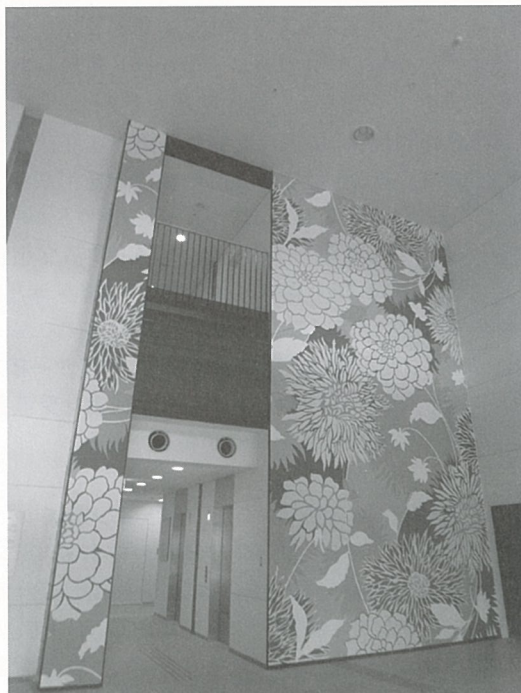
2004年9月には「パブリックスペース・デザインマニュアル」を取りまとめ、新キャンパスのパブリックスペースにおける空間の質?クオリティ・オブ・ザ・プレイスの創出とその継承を目的として具体的なデザインの方向性や手法について提示している。そのなかにおいて、アートワークもパブリックスペースを構成する重要な要素として、導入・整備の計画が検討された。(以上2005年3月「九州大学新キャンパスパブリックスペース・アートワーク整備検討業務報告書」より引用を含む。)

タウンアートは外部調査機関としてアートワーク検討業務に参画。アートワーク導入の第1弾である、工学部棟エリアにおけるランドスケープアート(作家:たほりつこ)の設置までを担当した。

本ワーキンググループでは、国内外のキャンパスにおける計画事例からアートの役割、導入方法まで入念に調査し、マスタープランに基づき、適切な場・展開・コンセプトを検討。アートワーク導入のガイドラインとして策定され、それらに基づき、「知」を刺激するものとしてアートワークが継続的に設置されている。



作家:たほりつこ



作家:マイケル・リン